

廣告

全國多數の本會員を有する箇所には此際
各々支部設定致度至急申出らるべし

明治三十五年十二月三日

東京市淺草區吉野町百九番

僧俗同信會

會員御中

告示

本會擴張の爲め栃木縣へ出張を命ず
常務員 鈴木 學
會員 中村 日 敢

栃木縣出張員鈴木學の隨行を命ず
明治三十五年十二月五日

僧俗同信會

告示

和氣支部長を委囑す

會員	吉田 完亮
會員	恒次 傳之祐
會員	藤本 治次郎
會員	萬波 盤太郎

和氣支部幹事を委囑す
和氣支部會計主任を委囑す
明治三十五年十二月五日

全 小玉 兼三郎
會員 秋山 泰二

僧俗同信會

規 約 僧俗同信會和氣支部

第一條 和氣支部は本部の宣言綱領に基き設置するものとする

第二條 和氣支部を本成寺に置き毎月一日三回を以て會日とし會員に於て本支部に關する要件議了後各隨意(二書)の盡習を以て六の日三回を以て公會路傍演說等臨機の布教を謀り以て統一の正業と爲す

第三條 和氣支部に左の職員を置く

一 幹事 一名

二 會計主任 一名

三 部長 一名

四 庶務 一名

五 書記 一名

六 庶務 一名

第七條 和氣支部の會計歳入出及會員費は壹名に付本

統一



目 要 號 本

新 年 の 辞.....

高等宗學院設置を歓迎して吾黨今後の方針を論ず.....松尾忍水

各派統一問題に於ける疑問の解釋.....清瀬貞雄

日蓮上人の國家觀.....窪田純榮

新 年 試 筆.....同

信仰は何所に求め得べき乎.....原田容廣

統一分子の聲.....山田奇峰

妙乘旅行記.....影山謙二

紀念大會顛末録に就き辨斥書.....増田聖道

高山博士を吊ふ.....松尾忍水

佛教衛生談.....今成乾隨

▲.....詩和歌俳句等.....▼

新 年 の 辭

第六の新年は來れり。規矩
 にも以たる處語を更めて
 こそ、しく繰り返すに
 も當らざるべし。只吾人は
 彼の水の漲々として絶へ
 ず流るゝか如く。改々休す
 ることなくして。相變らず
 正法の興隆を祈らん。設此
 處に亦餘事もあらざる也。
 之を爲すは。國主父母乃
 至自己の福徳を増進する
 所以ものにして。之に益し
 たる慶事や何處にかある
 べき。たゞ之ある而已

水亭

▲▲注意▼▼

●本誌廣告

本誌は本月より全國各停車場へ備付ることせり、
向は

●本誌月定め購讀者へは

法の鼓と無代添付すること、

せり、 (二月より始め)

毎月一回發行法の鼓は至極平易の文字にして法話あり小説あり、最と可愛らしき冊子也

▲讀者諸君

「統一」の隆盛と發達を成さしめ給ふは單に購讀者諸君の爲され方一也 諸君か購讀料を拂つて下さらねば

「統一」は退衰の止を得ぬ次第になります、諸君の方では月々僅かの購讀料でも、團の方ではそれが頗る多額になるはけですから、此へん御察しを願

又「統一」は本誌より全國各停車場に備付の事もあり月ぎめ購讀者諸君には法の鼓を添付することにもなりましたから、勞々運轉の油、つまり雜誌代を早く拂ひ込んでもらいたいのであります

統一團會計部

統一 第九十三號 明治二十六年一月十五日發行

統一主義

高等宗學院設置と歡迎して 吾黨今後の方針と論す

本宗に於て這度設置せられたる、高等宗學院とはうも如何なるものぞ、其れが發表の本宗告示は語つて曰く我顯本法華宗へ本佛別村ノ大法ヲ傳承シ以テ開通顯本ノ妙旨ヲ闡揚シ統一主義ノ綱領ヲ確立シ以テ諸教諸宗ノ謬乱ヲ指摘シ内佛祖ノ本旨ヲ守リ外萬機ノ惑溺ヲ拯フ開宗以來六百五十一年未ダ曾テ此本領ヲ失墜セシコトアラス是レ實ニ本宗ノ内外ニ誇ホスヘキ所タチ大凡譽ノ大ナル所ハ實亦大ナルモノアリテ之レ伴フ然レハ我宗ノ内外ニ負フ所ノ天職ナルモノ復實ニ高クシテ且ツ遠キヲ自覺セズシテ可ナランヤ果シテ此高遠ナル天職ヲ全フスルニハ首トシテ立教ノ大本ヲ明カニシ應化ノ妙用ヲ得テ以テ益顯本ノ妙旨

ヲ發揮シ統一ノ主義ヲ顯揚セスンハアラス殊ニ我宗ハ經卷相承ノ傳承ヲ執ルモノナレハ同一時代ニ於ケル専門ノ宗學者專任ノ敷教者ハ相互ニ教義ノ解釋ト化導ノ方術トニ於テ能ク其所見ヲ上下シ其融合統一ヲ圖リ以テ教義ノ紛雜ヲ匡正シ法統ノ純正ヲ擁護スヘシ決シテ自由研究ト經卷相承トノ言ニ托シテ區々法我ノ邪坑ニ陷没スルヲ許サス今ヤ此公正ニシテ且ツ光明アル希望ヲ満足セシメンカ爲メニ毎年數句ノ開教學篤志者ノ大會合ヲ計リ護法濟生ノ道念ヲ培養シ化法化儀ノ純一ヲ鮮明ニシ因テ以テ本宗ノ天職ヲ完フセンコトヲ期ス其組織ト方法トハ別ニ之ヲ定ム

是れに由つて之を觀れば、斯の擧たるや實に重大なる責任ヲ有し、而も此れに由つて得る處の結果は頗る宏大なるものあらん、今其主任教師を聞くに板本、山崎、板垣、錦織、小林、本多等の諸僧正にして、皆是れ一宗の長老本宗の碩徳を傾けたるもの、而して四方より雲集する所の志學者は、是又其他に於て既に一廓城を築き、各々旗幟を翻へせるの勇士也、血氣なる青年もあらん、勇氣ある壯年もあらん、僧正僧都の高位にあつて加ふるに辯論の士も亦少なしとせざるべし、而して此れが會合は溫暖平和の素情を通じ、布教實施の元氣ヲ活すべきや勿論にして、權實論や本論論や安心論や成佛論や淨土論や道義論や祈禱論や屬語文論や悉く其れが規道を行き、隨て亦各宗派分立の原由を探究し批判し、並に自他の疑問物たる眞逆の破邪顯正記等を評論し盡さるを得べきを思へば、眞に倫絶の感を感じて奮躍に堪へざるものあり、其開院さるべき祝日は正に明十六日にあり、本宗龍象數十百の初會日は實に明日にあるなり、其研鑽研晤の聲は僅に一夜を隔つ

るのみとはなれり、豈快哉の心起らざらんや、

嗚呼望多き宗學院はかくして開校さるべし、而て來る三月閉會の曉には如何なる方針に於て大舉傳道は見らるべきか、如何なる方針に依つて戰鬥開始は觀らるべきか、是れ吾人が今より最も熱視凝眸する所のものたり、其的標は何物を捕ふべきか、是れ今より其人の胸中既に定算あるべしと雖、吾人も亦豫め目算を爲し置くの必要を有す、從來勇氣充實せる我黨の士が、更に一層の活氣を加へて、步調整々敵陣に對する時に於て其第一に目指されたる敵將こう惘然不幸なるものなりと雖、亦是れ奈何ともすべからざるべし

若し之を一轉して平和の方針に出るあらんか如何、甚不可なり、今や宗教は其内外其宗派の何れを問はず旨義散漫し信念失却し、殆ど底止する處を知らず、爲に無宗義一團提の者輩、時を得顔に猖獗を送ふす、豈活款の至りならずや、されば今の時や百齡の老人も決して安居すべきものならず、八十の人若し尙、况や四十五十の人は甚だ若きもの、戦ふに恰好也、若し白髮の人は實盛を學んで之を樂み、以てより善き敵と引組むべき也、かくして散漫を統一し、信仰を増植し、無宗教家を腹すべき也、今の時は老年も少年も戦ふべき時也、况や恰好の人の老衰すべきに非ず、故に予は信ず、出たる宗學院の將帥は必ずや方針を戦に採らざる可らず進軍に把らざる可らず、而して其進軍の目的地の如何なるかは、若し知るとするも今余輩の言ひ得ることには非ず、之れは唯統軍者の方寸にあらん也。

(忍)

水)

日刊新聞發刊に就て

門下合同期成同盟會は其運動の第一着手として日刊新聞を發刊せんとす、夫れ新聞紙は云ふべき口也、然り而して門下を以て一の生物と假定せんか、彼は必ず日に云ふべき口を欲すべし、尤も各々月幾回の機關紙は之を有てり、然れども之には余りに不便也、彼は必ず日々言云ふべき機關を欲せん、門下數百萬の信徒なるもの果して之れありとすれば、唯僅に一の新聞紙の發刊何の難きことぞ、十個の日刊新聞尙多きに非ざる也若之をしも難しとせんか、日蓮門下なるもの亦微々たるものならずや、此際門下の人々は義心を起し、進で之に加入し、同盟會等の人々を補け、必ず之を果さしむべき也、是れ宗義上に於ける一分の公心とも云ふべきものならむ也

(忍 水)

新年海

風 法 華

春光曙色赤浮沈

萬里風波運此心

蝦島涉在深幾丈

執典島佛二風深

各面評論



日蓮門下の統一問題に於ける疑問の解釋 (演說筆記つゞき)

清 瀬 貞 雄

これまでは統一問題に於ける疑問中の第一疑問に屬するところの、彼の現状の儘にて結構である夫れでよろしい、別段統一などをせないでもよろしいと云ふ疑問の解釋に就ては論し置きたる次第であります。之より更に進んで第二の疑問に屬するところの彼の一種の云ひ草である。それはコウである。則ち統一の事たる釋尊なり日蓮聖人なりの御本懷であつて頗る結構である。大に善美なる事業である。だが併し所謂謂ふべくして行はれぬ事業である。理論なり目的なり主義方針なり悉くよろしいけれども、併しながら統一事業は余りに大事業であるから實際には中々に行はるものではない。口よく云ふべくして實際には行はれぬことである。云ふこの一種の云ひ草に對して論して見ようと思ふ。

諸君よ所謂る其云ふべくして行はれぬと云ふことは。いかなる事に就き又いかなる場合に云ふことであらうか。いかなる場合にも又ドウ云ふ事柄に就ても加様の言葉と以て之を評し。或は一場の笑柄に登ばせて行くならば。天下一物として行はるものはありませぬ。事業などは成し遂げることは出来ませぬ。抑も能はざるごとく爲さざるごとく。の言葉は元來よく似て居りませぬ。其性質に至りては大に異なりて居ります。これに就いて彼の孟子に分り易く譬を以て論じてあります。ソレハコウデある其所謂る能はざるごとく。爲さざるごとくの相違は。茲に人ありて曰く。君等よこれから一ツ泰山をわきさばさんでソクウて北海をこへて見よ。それができたなれば君等は中々に事業家である。加様に申したなれば諸君ドウでありませしよか。それが出来るであらうか又出来ないであらうか。斯くの如きことの出来ないと云ふも能はずと云ふも。これ實際であつて真に能はざるのである。ホントに出来ないのである。若し又茲に人ありて曰く。れい君等よソコの庭前の梅に花が開いて居るからドウゾ余が爲めに其梅の枝を一本一寸折つて來はて呉れまい歎と。自分より年もどり又身分の上の人より頼まれた時にハイよろしいと云はすしてイヤそれは私には出来ませぬ小枝を折つてあなたにあげるなどの。ソナナ六かしい事はトテモ私よはできぬことでありませぬから。あなたを御依頼ではありませぬと一寸小枝を折つてあげることはできませぬと。若し連中が骨れしみをして若し一擧手の勞をも猶且つおしんで。これをせぬと云ふことはドウでありませしよか。真にこれの人の云ふ通りにできぬのであらうか。否ナク決して其れが六かしいのでも又できぬことでもありせぬ。ツマリ横着で

怠慢で肯惜みでせぬので。所謂る能はざるにあらす爲さざるなりである。今云ふころの第二種の疑問とも謂ふべくして行はれぬと云ひ去りてソクしてこの日蓮門下の各教團の統合事業を云ふべくして行はれぬと云つて曾て自分自身がこの事の爲めに何の盡力したることもなく。何んの貢献する所もなくして唯できぬと云つて一擧手投足の勞をなさずして。左様な不熱心不條理なることは斷してあるべきの云はれなきこと、信じ居る次第である。統一事業は至極結構で全く美事でありと云ひながら。其ことに就て冷浴で坐上一片の笑話に葬つて一の爲すところもなき人物は。所謂る長者の爲めに枝を折らざるの類で。真にこれ能はざるにあらずして真にこれ爲さざるのである。況んやこの各教團統合のことたるや決して人よりこれを頼まれて殆めて爲すべきのものにあらず。苟も佛教者殊に吾日蓮門下の各教團のもの、如きは自己の本分として又教義の根底よりして是非に之れが統合を爲さねばならぬ先天的我等は大本領を有して居るのである。然らば自己の立場より考へても是非之れが事業に熱心誠意盡くさねばならぬ責任を持つて居るのである。中には随分對岸の火災視して居る先生もある。自己の責任を忘れたのも茲に至りてまた極まれりと謂ふべしだ。故にこの各教團統合事業が最も美事である。教義に於ても歴史に於ても將さに自己の本領として爲すべきである。爲さるべからざるの責任を有して居るのである其者が。右に云ふ如きことを口にして平然と構へて居るのは實に奇怪に堪へませぬ。自分の本分責任を知らざることを甚しきは驚くより外はありませぬ。論して茲に至れば各教團の僧俗は進んで統一事業には誠心以て盡力せばならぬ次第であります。これでも猶まだ云ふべくし

て行はれぬと云ひ平然として安途を貪り居ることが出来まじよか。苟も護法扶宗の精神のある人であるならばソウ云ふ冷淡なことを行ふて居る譯には行かぬ筈であらうと思ふのである。

又次に第三種に云ふところの疑問としては則ち凡そ物の進歩して行くに従つて。段々分離又分離細分又細分と愈進むに従ひて益細分するに従ひて進み行くものである。見よ彼の理學なり醫學なり其他百科の學藝に於ける進歩の状態を學理の分派則ち其學派の分れ来るに従ひて段々と進歩し來り居るにあらずや。然らば分派分離は則ち物の進歩するころの現象でありて。とりもなをさず分離分派は進歩の原則である。進歩を計らんと欲せば分派を憂ふべきものでない。今後益々マダ／＼この上に分離分派して行くが進歩の現象として喜ぶべきである。依りて統一などと云ふことは到底行はることもなく又好んで計るべきことでもない。統一を主張するものは退歩を主張するゝことになる。進歩を計るものが統一を主張しては矛盾の行爲になると云ふが如きの一の云ひ草で統一事業に對して一の反對説として世に行はるゝ議論の一になつて居るのであります。

であるから今この議論則ち反對論に對して解釋を試み其議論の如何に佛教上淺薄の考であるかを論駁して見ようと思ふ。

諸君今云ふところの其分離分派は進歩の原則であると云ふことは。元來何れより出て來りたる議論なるかを考ねばならぬ。この議論の根本は元來西洋の學説より起りたるところのものであつて諸君も御承知の通り西洋の學説などと云ふものは。一段又一段と段々に下より研究して上に登りてキツタものである。或る一人の學者が例へば一尺の研究を積んで置けば又他の一人が其上を一尺なり二尺なりと研究して積み上げたもので云はゞ西洋のは長年月の間に多くの學者が輩出して段々と研究して其上に又積みあげ／＼して。漸くにして今日の如き結果に到りたるものである。今日は致したるところが之れで最早研究が盡きたと云ふわけではない。尙マダ／＼研究の途中に居るものであつてこれ以て悉く研究が終了したと云ふのではない。見られよ彼の醫學なり哲學なりの進歩の状態に就て。實に驚くべきである。年一ヶ月月日に駁々として一段々々と研究の道程を徑つて居るのでありまして所謂の研究のマダ途中であると云ふのはこの譯である。ソゴデ佛教の教理は如何のものであるかと云へば。其西洋の學説の進歩てふものとは丸切り正反對のもので。則ち佛教の教理てふものは吾大恩教主釋尊が眞修眞證の結果。大に覺られたるので。其大覺大悟の大眼底より根本的に一大斷案を下された上に。一の規定を示し之れに則ちしめられたるものが則ちこの佛教であるのじや。それであるから釋尊を標準とし起點として行くのである。例へば西洋の様に一人々々積み上げるに。釋尊の後に出られたる論師とか人師とか又は先師先輩とか云ふ方々が澤山に輩出して其上／＼に釋尊教説のマダ其上に研究して段々と積み上げて進み來たると云ふ様な譯とは大に根本的に於て違つて居るのである。佛教としては釋尊本主とし起點として根柢邪説もたを釋迦以後のものは勿論釋迦の金言を則り手本として之に信服して決意に陥らざることと務めねばならぬのである。依りて今云ふところの西洋の學説則ち日進月歩の進歩の状態を以て統一事業に對して反對の議論を爲さんとするは。抑も根本的に誤りて居るので。ツマナリ佛教論

の根本義に通じないからである。して見れば加様な誤謬論。雙行論は。一厘の價值なきものとして埋了し去るより外はありませぬ。分派進歩論は稍高尚らしく學理的に反對論を唱ふる一種の乳臭論者があるけれども其學理反對論の取るに足らざることを斯くの如しナント統一論の前に來るところの凡へての反對論の價值なきこと實に豫想外のことではありませぬか。

以上第一種、第二種、第三種の統一に對する疑を築かねばならぬので吾日蓮聖人が嶄新なる活方面を開かれ世を救ひ物を利させ玉ひしに就ては或る一種の極端家は釋尊以上にも云ひふらし。又本主論に就ても。彼此誤論を意面もなき今日に至るも猶コダ縦返し居るが如きものもあるけれども。夫れは畢竟ヒイキのヒイキだをしとも云ふべきで。反て聖人に於ては御迷或極る次第であるのじや。聖人が末法の導師として應誕の日には一言一行悉く釋尊の命慮を奉し其證言に則らせ玉ひたるのである。聖人の信奉すべき點。尊重すべき處は全く茲にあるのだ。コレハ談論が外へ行きかけたが。元來佛教としては釋尊の教旨を奉し之に依るべきが佛教の綱格である。故に釋尊の上に出て、誰れか「マダこれより上に研究を積んで。釋尊以上に教理の完備を爲すと云ふことは決してない。釋尊以前の外道の問的反對説に對して大略解釋を試みた次第であります。猶これより進んで教理的に於ても歴史的に於ても。統一を爲さねばならぬことを論じたいと思ふなれども。今は唯この三種の反對問疑に對して解釋を試みた次第でありますから。今日はこれで止めて置き更に席を改めて。教理上歴史上の統一論を爲さんと思ふのであります。

(完了)

日蓮聖人の國家觀(上)

孤松窪 田 純 榮

日蓮聖人の國家觀は世尊釋迦牟尼一代の綱骨一切經の心髓たる。法華經の眞意義を立脚點とし基礎とし。以て築き上られたる大觀なりとす。故に四味八教に之を説き隠すのみならず。法華經蓮門十四品に於て之を説き應せりと。聖人は明晰なる一大斷案を下されたり。而して法華經の眞意義を説明せられたるものを。祖判に由つて求め來らば。九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に具はつて。眞の十界互具百界十如一念三千なるべしと。聖人は實に斯の佛教の骨髓にして宇宙の眞理たる。事の一念三千の大法門を留點として。國家を照知し觀察せられたるを以て。直ちに現實の娑婆に即して佛國土を照觀し、凡聖の共居せる國土に即して寂光の淨土を知見せられたり。故に其透徹せる眼光を以て解釋せられたる國家觀は、一躍世界の宗教に冠絶せる古今獨歩の妙義なりとす、吾人は斯の大光明を發てる眞理に接觸して、一闕來復せる本時常住の妙國土なる此娑婆世界に安住し。萬壽無疆の新らしき日月を迎へたり。之によつて先づ筆を滌ひ硯を淨めて。聊さか日蓮聖人の國家觀を論議せんと欲す。

日蓮聖人の國家觀は法華經の眞意義によつて。組織し建立せられたるものにして。彼の法華蓮門及び四十餘年の諸經に説明せられたり。西方安養の淨土若くは東方淨瑠璃世界。或は密嚴淨土等の如く他方に於て。

吾人所期の國土を求むるにあらず。直ちに本時の婆娑世界を以て寂光の淨土とし。莊嚴せられたる常住の妙國土と稱するなり、是則ち法華經に顯說せられたる本國土妙の大法門によつて。證得觀見せらるるによるものにして。日蓮聖人の國家觀の建立點又茲に在て存す。故に聖人の國家觀は佛教中に卓絶せる古今無比の大談論なるは勿論。又法華經獨占の妙義なりとす。知らずや華嚴阿合方等般若觀經等の諸經は。兜率の性生西方の極樂或は十方の淨土を勤め。而して婆娑世界を以て瓦礫荆棘の穢土と爲せり。然るに法華經の所説は全た是等諸經と異なりて。吾人が所居の婆娑世界を以て直ちに常樂の寂光淨土と爲せり。斯の如く爾前四十餘年の説教と法華開顯の所説とは。其淨穢の間隔實に霄壤の差あるにあらずや。是則ち日蓮上人の國家觀の特殊なる所以にして。吾人が諸經に冠絶せりと稱歎措く能はざる處。亦實に斯に在りと謂ふべし。之より論調を進めて其所見を開陳せん。

世尊釋迦牟尼始め寂滅道場菩提樹下に於て。盧舍那の身を現じて阿闍梨の教を説き。終り娑羅林の花正に萎はんとする處に於て、佛性圓常を説きて涅槃を示さるゝに至る迄。世尊一代五十餘年の經説橫演を窺がふに。彼の兜率安養の往生を説けるが如き。或は淨瑠璃密嚴等の淨土を教へたるが如き。之れ皆佛陀權智の巧説にして。對機調養の所作に過ぎざるなり。故に所期往生の兜率安養の淨土は。悉く之れ方便假説の遷滅無常の國土たるを免かれず。之に由つて若し能變の教主涅槃に入らば。所變の諸佛隨つて滅盡し去らすんばあるべからず。況んや其所居の無常遷移の國土をや。三災四劫の厄豈免かるゝことを得んや。然るに本時常住の本國土たる婆娑世界を以て。穢惡充滿の國土と説き以て之を厭離せしめ。而して兜率西方の往生を願はしめ。又は淨瑠璃密嚴を求めしむるもの。蓋し吾人の一考を要すべき處なりとす。

茲に於てか先つ世尊釋迦牟尼出世の一大事因縁を。精細に探討し來りて之が解決を與へずんばあるべからず吾人は敢て之を末學人師の爲せし判釋に求めず。進んで佛隨自から我が昔の所願の如く。今已に満足せりと本懐を示され唯此一事のみ實なりと宣説せられたる法華經によつて。其指不せられたる證據を摘擧せば云く終不下以二小乘一濟度於衆生。佛自住大乘一乃至。自證無上道大乘平等法。若以二小乘一化。乃手於二人一

我則隨慳貪一此事爲不可 (方便品)

日蓮聖人は此經文を判釋せられたりし。則ち法華經より外の四十餘年の諸經を皆小乘と説けるなりと。而して。機經を閱ひて實經に就べき事を明して。法華經涅槃の二種に依り十の證文を示されたりと雖も、今は繁を厭ふて之を省略するも。世尊出世の本懐は法華經にあつて存すること。何人も争ふべきにあらざるなり。然るに諸宗の末學偏執を堅くして經論を曲會し。佛の方便隨宜所説の法を知らずして。濫りに私義を構成し無智の道俗を迷はし、大小權實偏本述の區分を混同し、大乘を以て時機不相應。教とし。實教を以て難聖難と毀謗するのみならず。甚しきに至つては經典を以て拭瘡紙に比せり。斯の如くにして世尊一代説教を紛雜ならしめたりと雖。日蓮聖人の出興せらるゝありて。本化の智眼を以て佛教の大小混雜權實紛亂の亡狀を審理し。世尊釋迦牟尼自證真實の大法を顯示して。末法時機相應の教義を確立せられ。以て勝劣淺深成

不成の界畔を標榜し。彌猴を敬て帝釋と爲し瓦礫を崇んで明珠となせる。黒闇の一類を阿賈し諸宗は無得道の教にして。法華經獨り成佛の大法なりと呼喚し。昏睡せる我國の佛教界を警醒せられたり。日蓮聖人をしつて斯の如く絶叫せしめたる所以は、唯に諸宗僧徒の醉生夢死せるを喚起せしめたるのみにあらずして。彼等が權教宿習の爲に未學人師の非義を謬執し。名利の爲に實を捨て權に従ひ勝を指て劣を崇む。之に依つて災禍を國家に降し生靈を邪徑に導き。死しては生死に流轉して永く出離の機を失ふを憐みて。叱咤せられたる慈悲哀愍の福音なりとす。見ずや本地常住の本國土たる此國を以て。實に彼等は穢惡充滿の國土とし。遷移無常の境界とするにあらずや。而して彼の兜率の往生西方の淨土を求めんが爲。泣くが如く訴ふるが如くに哀音の念佛を唱ふること。暮秋の蟲吟に似たるものあるにあらずや。己に哀憫の誓を成す是れ亡國の音なるべしと。山門の徒の言へること亦理なきにあざされども。吾人をして隨義轉用せしむれば。彼の徒も又此圖外に逸出すべからざる。自繩自縛の械枷なりと謂ふを憚からず。大集經の如く。吾人をして隨義轉用せしむれば。彼の徒も又此圖外に逸出すべからざる。自繩自縛の械枷なりと謂ふを憚からず。遷滅無常の國土とし瓦礫充滿の穢土とせるや。一佛の所説に於て而。雲泥萬里の相違を見る。吾人は之を日蓮聖人の説明に聞かんか。聖人は實に左の如く判釋せられたり。

然善男子我實成佛已來。無量無邊百千萬億。那由佗却等云云。此の文は華嚴經の三處の始成正覺。阿含經の初成。淨名經の始坐佛樹。大集經の始十六年。大日經の我昔坐道場。仁王經の二十九年。無量義經

大の我先道場。法華經方便品の我始坐道場。等を一言に大虛妄なりと破る文なり。此の過去常顯はるゝ時諸佛皆釋尊の分身なり。爾前述門の時は。諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛。故に諸佛を本尊とする者。釋迦等を下す。今華嚴の臺上。方等般若大日經等の諸佛。皆釋迦の眷屬なり。今爾前述門にして。十方を淨土と號して。此土を。穢土と説かれしを。打かへして此の土は本土なり。十方淨土は垂迹の穢土となる。佛久遠の佛なれば。進化他方の大菩薩も。教主釋尊の御弟子なり云云。(開目抄)

此の本化の高判によつて之を觀るに。四十餘年の經典に示されたる華嚴密嚴。及び兜率安養の十方の淨土は。了れ實には。悉く皆垂迹示現なる無常の穢土にして。爾前述門に於ける假説の淨土に過ぎず。故に東方の藥師如來西方の阿彌陀佛。及び華嚴の盧舍那眞言の大日其他十方世界の諸佛は。之れ教主釋尊の分身又は其眷屬にして。法華經壽量品に來つて伽耶始成を破りて。本佛の久遠實成現はるれば。華山と蟻塚との比尙譬へにあらず。豈勝劣を論するの要あらん。能説の佛は此の如くに之れ有始の權佛にして。實には夢中の權果なり。而して所説の淨土亦常住を期し難し。日蓮聖人の大虛妄なりと斷案。下されしもの。固より當然の理なりと雖も。若し虛妄の法によつて衆生の利益を得ることあらば。佛陀大慈の慈悲禁すること能はず。調機の爲に姑らく虛妄の説を爲す。涅槃經に「如來雖無二虛妄之言。若知下衆々因二虛妄説二得中法利上者。隨二宜方便則爲説之」世尊は自から宣説せられたるにあらずや。而して其虛妄の法とは何ぞや。四十餘年の隨他方便の説之れなりとす。果して然らば彼の兜率安養淨瑠璃密嚴等の十方淨土は。則ち隨宜の説方便の教虛妄の法

たるや。多言を費さるゝも既に暇らかなりと雖。吾人は特に之を日蓮聖人の聖判に問はんか。

問云見ニ華嚴方等般若阿含觀經等諸經。勸ニ兜率西方淨土其上見法華經文。勸ニ兜率西方十方淨土何處ニ此等文。但勸ニ此瓦礫荆棘之穢土乎。答云爾前淨土久遠實成釋迦如來。所現淨土實皆穢土也。至ニ壽量品ニ定ニ眞實淨土一時。此土即定ニ淨土了。(中略)法華經無結緣衆生。當世願ニ西方淨土。樂ニ瓦礫土是也。不信ニ法華經ニ衆生。無ニ令淨土者也。(守護國家論)

既に論じ來りしが如く。彼等が所謂期の國土は皆悉く瓦礫充滿の穢土にして。實に成劫の上の無常土にあらずや。然るに本地常住の妙國土たる此土を捨離し。好んで無常の穢土を願ふ。又憐むべきにあらずや。茲に於ては彼等が國家觀と。日蓮聖人の國家觀と天遙かに異なるを首肯せずんばあるべからず。嗚呼此の兒惑むべし權教假説の毒にあてられく。心皆狂亂顛倒し救療を求むと雖。色香味美皆悉具せる是の好き良藥を服せず。當に方便を設けて此の良藥を服せしめんとするも。而かも肯て之を服せず。徒らに方便虛妄の情執に驅られて無功の行儀を企だて。却つて一乘眞實の法華經を誹謗し。遂に阿鼻の苦報を免かれず。而して彼等の欣求せるの十方淨土は。彼の唇氣樓のうれに似たるものをや。蓋し隨他方便の施設にかゝるを以て。三世十方の諸佛は之を證明を爲さず。佛は自から未顯眞實と破せらる。兜率西方十方の淨土の夢物語りに固執し。本地の國土常樂の妙土と觀するの徒よ。吾人の之より論せんとする日蓮聖人の國家觀を窺ひ。活ては國家不忠の罪を免かれ。死しては無間の痛苦を避けよ。實に元旦は冥途の旅の一里塚なるにあらずや。大に反省を要すべきの事なりとす。

宗教文學



宗教文學の鼓吹

一、不健全文學の折伏

忍 水

今茲に其れが總てを指す可らずと雖、高潔を以て自居するの文學に、恐るべき繁害の隨伴せるものあり、何を何ぞと云ふに不健全なる文學是れなり、元來この不健全なる文學を鼓吹するものは、失戀者、不平家、悪世家、失敗者等に多きが如し、彼等は自己の失戀、悪世、失敗、不平等を訴ふるに所なく、鬱々たる胸中の黒烟を左も悲憤悉漏に書き立て、其黒き文學の印刷に附せらるゝを以て、僅に知友を得たるものとして

之を獨樂せり、彼等は確たる理想あつて之を語るに非ずして、多く鬱散の爲に爲せる也、偶理想あるものありとするも、并は初めより爾く確實に理想を定めて之を唱ふるものに非ずして、悲哀若くは不平の感情が漸時凝結して病的疾固の理想となり化したるに過ぎず、彼等の一輩は感情一端に走りて敢て常理を惟はず、甚しきは眼中國家なきを主張し、倫道なきを主張し、只別に清樂園ありと云ひ、行くべき道ありと云ひ、説能く人の交際に乗するに足り、爲に未だ弱點多き不安心の者を己が暗室へ誘導する也、殊に予輩の甚敷憂ふる處のものは「死」の中に光明あるを勸むる一派是也、彼等は宗教家が云ふ如き淨土、極樂、天國等あるを指して、而して死の恐るに足らざるを云ふに非ずして、淨土も天國も無く、又自信もなく救はるべき者もなく、只々「死」其ものが頗る樂しきものなるかの如くに説く也、我日本に於ても念佛宗の盛なる頃は、「哀音念佛亡國の聲」と叱せられし時に於て、歴史上會々此事あるを認め居れるものなるが、近く明治の日本に於ても耶教趣味の文學者、我國新文學鼓吹としての最も恩惠ありしとする某は、死の光明ある主張を、念佛の善導が抑に益たるが如く遂に都市の公園に於て之を實行したり、時彼等の属類は嗚々して慰むるが如く稱道したりしも、心ある文者は悲むべき現象として之を排斥したり、頃日傳ふる處に依れば有名なる英國の小説家マリア・コレリ撰の著「マイチー、アトム」を讀みたる耶蘇一僧侶の兒は、書中の人物の死したるに感激して益死したりと云へり、這は彼れ某等と同一視すべきものか否かは知り難しと雖、兎に角其著の不健全なる鼓吹なりしを推知するに足るべし、彼等は其死を見て「死の神」がニター〜とよろこぶが如く、彼等の筆の上に續々實行者の出るを祝さんと云ふものあらんども、若し斯の如くならば尙更健全なる文學を以て彼を撲滅し、なやめるものをして雨の夜の魑魅魍魎より救し出し、晴天白日に誘ひて夜又惡鬼をして乗するに便り無らしめざる可らず

(未完)

不新遂に筆なき人となりたり

友人　しのぶ

「何分獄内に在りては筆硯の自由を得ず候故思ふ處を充分かきて送るわけに參らず残念に候過般來二三回通信申上候にも看守と推問答數回の後に於てせしに候今回は何もかく事相出來申さず候」之れは不新君が客十二月申予へ送りし音信の一節也、嗚呼彼の筆は遂に他の爲に折られたり、彼は遂に筆なき人となり了れり、予は彼の暗裡の人の様を悲しむよりも、斯事に於て太く同情を寄するもの也、尙ほ新体歌二首あり

筆をおれ硯をくだけよしさらば

わさかへる血の狂ふに任かせん

何故にとゞめ玉ふぞ虫の音にも

世を救ふおしぬこもらんものを

我同志願くば彼の境遇に同情を表せよや、彼は志想ある青年、多く得がたき血の男子也。

○御題 新年海

清瀬華城

あら玉の年ことにうひもたらすは海の國てふ想なるかな

○明治聖代の太平なるを祝さまつりて

薬師寺彌

四ツの海なみ風もなく立ちかへるうしほとにもにあら玉の年

○勅題

江田照

運艦海もとるにうつ砲の音ものとけく年たちにはけり

○勅題 新年海

笹川日應

二海 波 静 かに 明 て 御 代 の 春

鏡 は ど 海 平 ら け し 御 代 の 春

六合庵彌

元日や日本國中羽根の音

むらさき

あの人もいたちを正す御腹哉

同

福壽草や障子の外は手まり歌

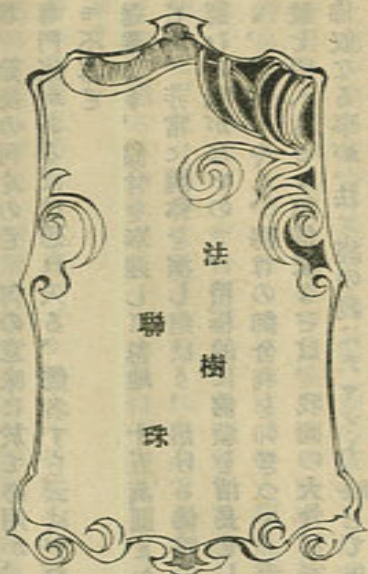
同

元日や辻うらを賣る人もあり

同

苦も樂も落してゐるた拾ひ哉

同



新年の海 (試筆)

窪田孤松子

千年の形見に残る濱の松風、千年の昔より打寄る波の音、二つなからに非情無心のもの、されども調へ正しき松の琴、磯打つ波の鼓みの音、千年の昔に變はらず、萬代の末にも異ならずして、二六時中に天然の音楽を奏し、妙のみのりの響きを傳へ、治まれる君が代は、千代に八千代にさわれ石、巖となりて苔のむす、其又末の末かけて、すゑの松山波こへる、そのときさ

でも長久と、賤の小田巻くりかへし、操返しつゝ大君の、寶祥を祝ひ奉らんと、國もゆたけき日の本の、東の海を遙かに望み、波静かなる海原より、登る初日を伏し拜み、高麗唐土は誦はすもがな、普天の下率土の濱、天津日嗣の日の御稜威、照さぬ隈なき日のみ影、實に明らけく治まれる、六六三十六の春、天が下なる民草も、皆己がし、萌へ出て、千尋の海の底知れぬ深さめぐみをうけまつり、資生産業に身をやつし、憂さも命の生田の海の、藻屑の敷の外國までも、我日の本や秋津洲の、動かぬ國の礎を、知るや知らずや白波の、男波女波を隔てたる、あなたの國の國人に、仰ぎまつらせばやなんと、濱の松風磯うつ波、常住不斷に限りなき、佛の慈悲をたへつゝ、如渡得船の妙法を唱ふる自然の音楽なれども、もろ人如何に聞つらん、谷の戸出る鶯の、囀る聲のみ法經と、聞くは迷ひの爲なるべし、川流江河もことごとく、皆法華經の海に入り、同一鹹味の潮となりて、信誘彼の差別なく、皆得作佛の疑ひなけん、南無妙法蓮華經

統一分子の聲

原田容廣

○雜亂動請の不可なるを以て攻むれば、彼れは云ふ、改宗者の手引なりと、再度之を難すれば得意然として云く、收入に關し寺門の經營口糊に苦しむと、嘆嗟其の人を見れば、即ち日蓮門下の僧

○聖祖は、守護の善神、弘法の佛菩薩と仰ぎ給ふ、トコロデ今ハ、手代番頭の如くに考へられて居る

○佛陀や菩薩の、大慈悲大知見は、最も多方面に活動され平等の善だのに開連の日蓮、祈禱の本尊、未來の本尊、除疫の何んのと、何の意味に於て必用か、神佛の専門家があるには恐れ入る、儒者すら云はずや、君デモ不器と

○暹羅より、佛骨を奉迎して忽地、十五萬圓とか八萬圓とか、非常に醜体を演し廻はり、活ける佛陀の存在を認むる腸がないので、積極的に佛教を消長せしめらるゝ、名僧やら、釋尊の御舍利を仰ぎつゝ、六字の名號を唱へらるゝ篤信家などは、我國の大骨殖家、否殺佛奴なる事が、法ヶ經の鏡にチャント、映じて居るゾ

○世界の宗教の多くは、一世とか二世とか、より説明

がない然るに、大聖釋尊は三世を明解されたので、現在吾人日常の必用が澤山に説示されてある、トコロガ病的の人物が出て、最も未來觀に力を入れたから、佛教が現社會國家を無視した様に思はせた、此れもヤハリ殺佛罪だ、法然眞覺上人はソコラニ居給はぬかな

○今の佛教諸宗内の多くは、佛教を殺したり、未來に重きを置ても成佛が覺束ないやら、社會に貢獻する處が寡いやら、吾人人類の大疑問を解釋し盡せないよムだ、早く財を付けて元の印度へ御返却するが至當だソコデ、此等大問題を明解し盡して居るのが、法華經典である

○檀家から、年に何俵何程にて入寺ありたし、左なくバナゾト賣買風に、出るスルト僧侶が其の言に尾隨して全身の熱信を捧けあらゆる、蟻を呈して、而して漸く罷ると云ふ榎梅では教へどころでない、ラルル方だ、其のラルルが多いには驚いた

○沈黙靜止以て、聖人を氣取り、高僧然として客殿ズツト奥深く安座をします連中は、佛祖に對しては慚死すべきだ、サレド違ひ道もある、超人指南役ならに

○釋尊は印度の宗教大革命者で、日蓮は日本の宗教界

大革命者だ、爾來六百數十年間うの實がない、吾邦已でに第一期の革命は終るも、第二期の革命を待てるは事實看より人類の進歩は革命の功果、世の歴史は革命の記録也、今吾邦人の迎へんとするは、殺人叛亂的に非すして、平和的なりと吾門下は聖祖に對し目送し居ては濟さぬ、統一事業は大革命のそれ自身である、未同者と敢て恐るゝ勿れ、統一とは平和の謂にして、関的に非す

○吾か宗義上所依の經典がドウダカ一向知らぬ癖に捨劣得勝主義かの如く誤解するやら本尊問題ヲ主張するど神佛を切り捨てるかと恐怖するが全体會社はドオシタソウ兒稚カシラ



來者不拒

山田奇峰

抑も信仰とは何ぞや、此れ世人の提供し易き問題にして而も解釋に苦しむ大議案なり、謂ふまでもなく信仰は人生の最大要義なり、宗教の根本命題なり、宗教は此の信仰の基礎に立ちて始めて活動するものなり、宗教にして此の信仰の確立するなくんば此れ宗教にあらざるなり、人生にして此の眞意義を悟領するなくんば此れ人生にあらざるなり、邦國にして此の根本義を捕捉するなくんば唯だ之れ一群族のみ、暗夜に明なく、犯地に生なく、事本末なく始終なく、理善惡なく邪正

なきなり、徒に蠢々として盲動し、悶々として役死する塊物のみ、自由なく、活動なく、統一なき一種機械的アミーバのみ、衝動の慾望と、反射の作用とに驅馳せられつゝあるものなり、親子同胞なく、國家社會なきなり、又た權利義務なく、慈悲博愛なきなり。

吾人は理性的動物なり、又感情と意志とを享賦せられたる將完の物體なり、如何に人生をして無意義に俗化し去りて、凡なる生活を營んと欲するに能はざるなり、必ず或る絶対無限の存在を感得して、煌々天地を光被し、堂々大んを闊歩し、蹉跎なく、怨嗟なき、圓滿幸福なる活生命を悟領せらるゝにあらざれば、吾人は決して安穩就業すること能はざるものなり、遺教の

大確證を得得するなくんば、吾人は恰かも、小人の財布を失じたる、小兒の親を喪いたるが如く、悠々人生の大道をば、恰かも危険暗黒たるが如く觀念して、一步も進み能はず、鬱憂寂寞に堪へざるものなり、嗚呼偉なる哉、宗教的生命の得否、大なる哉信仰的安處の憑否、此れ實に人生の最大最要の關門なり。

るにあらざれば、以て他事を習得するの權利資格なきものなり、否吾人の天性本質は本來自然に之を求めむと欲求して止まざるものなり、然らば吾人は如何の方法をもて、如何の場所に求むべきか、此れ實に本論を草する大命題なり。

寺院は果して信仰の府庫寶籙なるか、今や我か宗、三千の伽藍堂塔あり、巍々雲際に聳、金色燦然爛として眼瞠々眩惑せしむ、優に人をして腦殺せしむるに足らむ、而も今は此れ吾人の求むる信仰の所在にあらざるなり、唯だ審美的情緒が美麗なる畫幅を見る時と其の觀念毫も異ならざるなり、未だ白扉懸倒の富嶽を望み、青海原の躍濤を見し時の如き、天然物に對して起る崇高の感念さへも起らざるなり、吾人の宗教的情操は史して斯る堂塔には満足せずして、猶ほ他に何等が絶大なる或物に寄托し、憧憬し、一致合体せしむる底のものにあらざれば、安んずる能はざるものなり、否な事ら茲に反對の現象を観察するにあらすや。

僧侶は果して信仰の自覺々他の人なるか、今や我宗八千の教職法器あり、紫金の袈裟、綾羅の法衣、表信の印綬、袖聖の經文、威儀の念に咽ばざるにあらす、

尊の觀に、かれざるにあらす、然かも一たび其の教相を問ひ、其の觀心を質すに於ては、輕荒誕、查として要領を摘括するなく、聞き終て自失狂然するを覺ゆるのみ、就中尤も酷しきに至ては、自宗の信仰個條の形式をさへ知らざるもの濟々皆な然らざるなし、吾人の宗教的認証を、史して茲に満足せられざるなり、猶ほ他に何等か偉大なる或者を追慕し、渴仰し、認証し、理解して、真大解脱を得んと欲するものなり、今や吾人は頗る煩悶を疊ねざるを得ず、吾人の夙夜に希望しつゝある信仰の所在は、遂に寺院にあらす、又僧侶に在らざるなり、然らば更らに何れに何て求め得べきか、吾人は謂らく、此れ畢竟、寺院の莊嚴其の信を得ずして、信仰を冷却せしめ、僧侶の學識其の益を得ずして、信念を殺傷せしむる如已にあらすして、寧ろ茲に宗教が一大刷新せざるべき時期の來りしを記せざる可らず、宗教刷新の時期と稱するも、開き宗教の本質其もの變遷にはあらで、形式の進歩なら、信仰の實體其もの轉化にはあらす、容儀の發達なり、斯は從來の習慣的信仰が破壊して、新に理想的一大信仰の將に達せられんことを、懷疑すべきにあらざる

なり、其の稍もすれば、舊的信仰が其勢力を挽回せしを努むる如く見ゆるも、开は眞に連轉の情力のみ、早晩停止せらるべきものなり、其が眞の自轉動力にあらざるや明かなり、今や一般に眞信仰を要求し來るは、實に動かす可らざる世界の大勢思潮と云ふべきなり。

吾人をして時代思潮に感誦されたるものと妄評するを止めよ、吾人は現代の如き薄濁なる輿論に腰を折りしものにあらざるに反し、習慣的舊守の信仰にも信服する能はざるものなり、吾人は吾人と同一觀念を抱きて、求信を渴仰しつゝあるの士と共に、斯道に向て進まむと欲するものなり、固体既に形容を爲して復、手を就く能はざるもの、如きは敢て顧みる處にあらす吾人と同感の士よ、世の偽以信者を嘲けよ、又自己の表面的信仰を装ふの假面を脱して、眞正に中心より燃々熱望する所の活力を以て求めよ、然らば豈に得らるべきことかはある、而して其の第三に向て求むる所は何處ぞ、唯だ一に「教祖の聖書」によりて始めよ、若し至誠至信の道に入るあらば、曩くは宇内を統一すべし、大理想的新信仰を建設し得べき、曩に當中するを得ん、如何にせば眞新信仰を發揚し得んか、此

れ實に求道者の當然歸すべき月桂冠を專有する特權に價するものなり、吾人をして少しく其の過程を述ぶる所ろあらしめよ。

吾人の到達せんと欲する所の信仰の形式は、其を考想し得べく甚だ困難なるものにはあらざるも、而かも其を言説するは極めて文學なきに若しむものなり、今其の一二を摘要せば、吾人の欲求する信仰の對象たる本体は、本有的不變的の形而上的絕對無限の存在にして、而も開かぬ無寂靜のうちに常に具體的に活動し、諸法と實相、假在と實在、相對と絕對とが相關相即融通無碍なる、根本原理を信念し、渴仰し、吾人精神の内的眞活動は、直ちに絕對無限の派生となり、吾人精神の憑依する基礎は、直ちに絕對無限の靈的活動なることを實現して、身心をして眞正解脱の大安心を感せしむる底の現時的のものたるを要するものなり、眞宗的信仰の如き、未來的、倚賴的、壓制的、厭世的のものにあらずして、尤も現世的、獨往的、自由的、樂天的のものなり、眞言宗的信仰の如き、非論理的、秘密的、呪咒的、にもあらずして凡て此れ反證なり、又基督教の如き想像的、超自然的、秘的直觀主義

にあらずして、實在的、寫象的、顯然確認主義のものたる可らず、換言せば吾人の全精神（智慧、意、全体）が圓滿に安んじ、満足し又た常に一種の活希望を抱き得る底のものたるべきを要求するものなり。
上述の如き吾人の求信の過程は、甚だ煩瑣に渉るなきかの感あらむも、而かも此れ困難なるものにはあらずして極めて容易なる求信法なり、吾人は這個のものにあらずんば到底満足する能はざるものなり、即ち此の目的に適合する最も簡易直截なる良法を、吾人は「教祖の聖典」に依て、探究し以て現代思潮の衰頹を復活せしめんと期望して止まざるものなり、猶ほ組織的研究の如きは、更りに鍛練推敲の上述する所あらむ今日唯だ想考の直寫を記するのみ。

妙乘旅紀行

▲……舟中の清興と、備前天神山……和氣道徳の大靈源と路傍布教……忠孝両全碑録のまこと……播州赤穂正法の曙光と安國會の布教及び予の演説……▲

影山謙二

人として風流の心なきは、花として香なきか如し。

と白河樂翁は云ひき。げに萬人にありたきは、風流の志想にこころあむめれ。予は、強て風流を好むとまでにはあらねど、年來風雅を愛する心の斷絶やらず、何時もながら、旅行とし云へば一入こゝろの勇み立つが常なり。おもへば丁度、去年の此ごろは、西の方九州に遊び、額翁が一代の感吟、「耶馬溪山天下無」の詩と共に其名も高き、豊前の耶馬溪に、しばし浮世の塵を洗ひき。今年また、月の十日に、少かはかりの所用にて、播州赤穂に旅ひすることゝはなれぬ。うれかあらぬか、蕉翁の、東海道一筋も知らぬ人風雅に覺束なしとの諷語も自然と想ひ起されて、あへぬ先師に、地下に歸さざるゝ心地し、われ誰らず與に呼かれて家を出てつ。

二

耶を出て隣村、かねて同行の約ある、井上清六郎君の門を叩き。まだ夜も明けぬ寒空に、時ころ今や落葉月、吹く風の淋ひしさは、又したゝかに身に迫り、星だに見へぬ眞霧の闇路。燈すゝと穗の提灯に、途を扶けて迫りつゝ、便り借らむと倉敷の、飛船の會社を音訪へば。今日に限て一艘の出船となしとの舟子か應へ

來者不拒

は、二人は持つ物おどしたらむ思ひして。少時しが程は、途方に撞きくれ、兎やせむ角やせむ、と逡巡しが斯くてもあらねば、終に意の紐をしめ、徒歩、備前相氣に出つべく進みぬ。さはされ、途中また便船もあらむかど、櫓の望を川船の上に懸けつゝ、流れに沿ふて下るほどに。備前周匝に到りて、岸の彼方に、荷物積める、一葉の浮き寶の、今しも碇を締めて、纜を解かむづる有様なるを見受ければ、地獄で佛、盲龜に浮木のおもひにて。二人は舟子に乞ふて飛ひ乗りつ。さて此處は、吉ヶ原、草生には、ほど近しと聞くからに吉田、武の二師を訪ひ参らせむと思ひしかど。心にまかせぬ出船の瀬戸、はや身は揺られて下り初めぬ。予は川船をいと珍らしく覺れば、興に乗して一酌を傾けつゝ。およろ、世俗の樂みは、心を迷はし身を損ひ、人を苦しむるが常なれど。迷ひなき安心に住して神を養ひ、内こゝろの樂みを本とし、時あつては、花鳥山水に對ひて、外耳目の樂みを取るが如き、是れどまことどの君子樂みならぬ。なご懐ひ出して。四方の山色澄淨の清流、夫れより夫れへと、且つ眺め、且つ賞し縦ひ王侯の貴きも、南面の樂みも、如何で我が此の一

日の清興に易ふへきやと。主なき山水の景色を、わが物の故の誇りけに、井上君は目の症ひの養生に、禁めりどあれば、予れは虧げ徳利かた手に飯む程に。いつか漸く、酔ひば總身にめぐり來て、われ知らず姑ばしをどろみしが。醒むれば、はや船は天神山の裾を漕ぎ行きつゝあり。山は峭しく峙ちて、峯は頭の上に臨み流れ殊に廻りて細く、怪巖峻々として屏風をたゝめるか如く、壁を築きたるか如く、龍の躍るか如く、師子の踞るか如し。さては岩間に茂る老松の、幾千代かゑぬ操の翠は、末法の世の澆季を嘲るにも似たりける。あたり視をはず限り、千景萬色、はどく／＼拙き水莖の得も及ばじ。たゞ眸をめぐらすに従ひ、山走るか如くに於て、李太白が「輕舟既過萬里山」と詠せしも、かゝる境にありしやと思ひ合されつ。かく松中の興趣に背拱して黙然と立てる間に、船は和氣町の浦岸に着ぬ

高山博士を吊ふ

松尾 忍水

博覽の學と拔妙の筆ありて、而して日蓮論以後に於て特に其奇俠を知られたる、樗牛高山博士は逝けり、博士の一度日蓮を信せし以來、滿身の力を以て新らし

く之を世人に紹介したり。永く世間の多くが見誤りし日蓮上人をして、其一分の誤を解さたりし博士の功は、予等門下の大に多とする所也。予や客歲東上するの時、畏友田岡嶺雲兄より函書を得たり、而も宗内紛擾の際、續て種々難務に逐はれ、未だ親しく其警談に接するを得ざりき。頃日漸く小閑を得るの時、忽ち斯の悲報を聞く、予の心中亦平かならざるものあり。然れども是れ亦如何ともすべからず、直に予の信する稱題を以て手向け了はんぬ。唯博士の日蓮論や未だ其百個の一を盡さざらん、更に世界の士を驚かすべかりし大日蓮論は、行くべき博士の路伴となりて、遂に見る可らざるものとはなれり、豈矢望の嘆聲發せざらんとし、て能はざ也、されど英僧日蓮論は、必らずや、亦譯人かの筆辨に依りて爛熳櫻花の盛りを見るを得べし。是れ實に博士の後繼者ならずとせんや、斯言以て冥せよ焉

日蓮聖人開宗 第六百五十年

紀念大會顛末錄に就き辨斥書

速記者 増田 聖道

本年四月舉行せられし日蓮聖人開宗第六百五十年紀念大會に於ける大演說會速記及宗徒大會議事録は拙者責

任を負ひて速記せるものなり、而して其が顛末録は今回出版天下に公布せられたり、然り而して其が發行の遅延せる起因に關し、曾て日宗新報第八百二十號末尾同八百二十七號期成同盟會記事、及び今回發行せられし顛末録末尾に於て、左の拙者が無責任極まれる速記をなせしが爲の如く當事者即ち殘務主任者小倉豊三郎氏は田中智學居士脇田堯惇師の言に依りてと云へる下にて不穩當極まれる文字を以て廣告記載せられたり何ぞ其の暴慢にして誤されるの甚だしきや、由來拙者は速記に従事すると茲に十數年、未だ曾て一回だも無責任なる速記をなせしとなし(勿論普通の例として演說速記原稿は一應其か演說者に示し演說者をして其が已れの意思の足らざる點を補足せしむるとはあるなり)然り而して當春紀念大會大演說會に於ける田中智學居士、及び脇田堯惇師の如きは、已れ自ら無責任極まれる演說を取て演し、而して其が速記の天下後世に傳はるを深く恥ぢられしにや、ムゲに拙者の速記せしものを杜撰なり、不完全なり、不備なりとして只管罪を速記に嫁せられ、以て恬とし活蛙々々然として天下の耳目及び後世を欺き晦まし了せられんとせらるゝの

舉に出でられしが如きに至ては豈に市井の惡漢無賴の驅奴も當ならざる其の胸底心事の陋劣なる實に怒むべきの至りにあらずや、是をしも當代日宗有數の宗教家を以て任せらるる志士の行爲と謂ふべきや、拙者は二氏の爲め其だ深く惜む所なり、抑も當春紀念大會大演說に於ける田中智學居士の演說の如きは、已れ不明にして鐵道規則に觸れ、爲に抑留せられしを「演車法難」と云へる題下に得々然として演せられしに過ぎず。又た脇田堯惇師の如きは「開目抄の一節を講ず」と云へる題下に少しく講演せられしに過ぎざるのみ、二氏の演說果して日蓮聖人開宗六百五十年紀念大會而かも帝國の首府たる神田錦輝館に於ける大演說としての好箇適當せる演題なりしや否やは暫らく措き、正には是れ茶番狂言滑稽的演說否な寧ろ日蓮上人開宗六百五十年紀念大會を侮蔑せるものなりとの聲は眞々として當時到る所拙者は耳にせし所たり、夫れ婦人にして妊めるあらんか必ず産す、二氏の演說當時果して好種子の腹案ありしや否やは敢て言ふべきの限りにあらざるも、而かも其が演說せられし結果よりせば無責任極まれる演說を取て公會の大會に於て演せられしものと斷言するを

憚らざるなり、然るに妄に其が速記を杜撰なり不完全なり不備なりとして全く罪を速記に嫁し抹殺的所謂臭き物に蓋主義を取て行ひ遂げらるゝの舉に出でられしに至ては誰か其の胸底心事の汚穢陋劣なるを懲戒せざるものあらんや嗚呼荷も口に題目を唱へ佛祖を奉じ日蓮主義を唱導鼓吹するの志士として誰か是の如き行爲を容さんや是をも忍ぶべくんば何をか忍ぶべからざらん、拙者は速記云々の記事に關しては當時盲動者にあらざる具眼の聽衆者は己に自ら其が前後の成行さを知得せられあるを以て敢て意に介せざる所なりと雖も茲に一言せざるの己むを得ざるは單だ黒き文字を以て事を判別するの當時の聽衆者以外即ち天下の公衆及び百年後世の爲に速記の神聖を誤られんことを深く虞れ敢て茲に排斥し置くものなり、若し夫れ當事者即ち當時の主任者にして右の廣告を取消するにあらざんば拙者は斷々乎として天下に向ひ更に進んで之が内容を暴露表白するとあらんとするもなり

明治三十五年十一月

統一團報

●顯本法華宗高等宗學院の設置 全宗にては宗義の純一歸一を圖るを目的となし題名の如きを設置したり明十六日より府下品川町妙國寺及本光寺を教場となし大に高等宗學を研究する由也今其規定等を得たれば左に掲げん(右に對する告示は主義論中に掲げあり往見) 別紙高等宗學院條規ノ施行ヲ命ス
明治三十六年一月五日

管長事務取扱 本 多 日 生
宗務總監 小 川 日 豊
教務部長 井 村 栂 也

- 高等宗學院條規
- 第一條 高等宗學院ハ本宗ノ法理化儀ノ奧旨ヲ攻究シ其純正歸一ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 - 第二條 高等宗學院ハ本宗教學篤志者中ヨリ志願者ヲ募ルモノトス
 - 第三條 入學員數ハ參拾名ヲ以テ滿員トス 但聽講生ハ此限ニアラス
 - 第四條 志願者參拾名己上ニ達シタルモハ其採否ハ宗務總監教務部長大學林長ノ合議ニ依リ之ヲ定ム

- 管長ノ裁許ヲ請フモノトス
- 第五條 高等宗學院ニ採用セラレタル者ハ食費ノ補助ヲ受クルモノトス
 - 第六條 高等宗學院ハ本年ハ東京府下品川町妙國本光ノ兩寺ヲ以テ教及場寄宿舎ニ充ツ
 - 第七條 高等宗學院ハ本年ハ一月十六日ニ開院シ三月一日ヲ以テ第一回修了期トス
 - 第八條 高等宗學院ノ科目ハ別ニ之ヲ定ム
 - 第九條 高等宗學院ノ講師ハ坂本日桓山神日尊板垣日隆錦織日航小林日至今本多日生等ノ諸師ニ依曠シ猶科外講演ハ臨時ニ之ヲ定ム
 - 第十條 高等宗學院ハ講師講演ノ外ニ自修科ヲ置キ院生相互ノ知識ヲ交換セシム
 - 第十一條 本條規ノ加除變更ノ必要アルモハ宗務總監教務部長大學林長ノ合議ヲ經テ管長ノ裁可ヲ請フモノトス

高等宗學院科目

一書籍講義	本門正宗	本尊鈔	金 錘 論
一口述教授	權實論	本迹論	本尊論
	安心論	成佛論	淨土論
	道義論	祈禱論	勸請文論
	引導論	弘經ニ關スル	注意條項

各宗分立ノ原由及其批判
各派分立ノ原由及其批判
宗教學概論 結時博士著
破邪顯正記 眞退著 及其評論

一輪講口述

- 一實地布教及討論 演題ハ時々院内ニ掲ク
- 大學林專門速成本科の開始 昨臘宗令を以て達令せられし大學林專門速成科は去る十二日より東京府下品川町妙國寺内に教場を設け授業開始せり
- 評議員の改選 評議員全部欠員に於て去月廿五日總改選執行の處鈴木尊學横濱日渠内藤智厚井口善叔笹川眞應の五名高點にて當撰し各自承諾就任せられたり
- 擔當評議員と評議員事務所 今回改選の評議員は互撰を以て鈴木尊學師を擔當評議員と爲し其事務所を東京市淺草新谷町寛受院に移轉したり
- 現金取扱人の變更 現金取扱人鈴木尊學師評議員當撰に付其任を辞されたるに依り管長事務取扱本多日生師は常置員の協贊を経て里見圓海師に後任を命せらるゝ由
- 中村日蓮師の名譽 全氏の寺財の爲め盡されし處は豫て人々の知れる處なるが、今回先住地三島本妙寺檀家一同より、それを徳として左の表彰ヲ爲したりと云ふ、尙ほ同氏は右寄送の金員十圓を本園へ寄附ありたり、

本妙寺檀徒一結茲に謹て別紙目錄の物品を呈し聊か上

世尊の光明 教育の感化と宗教の感化 國家と宗教との關係を論じて佛教の統一に及ぶ

本佛の大慈悲 文開の信仰 山名木信廣 山名木信廣

にして午后十時半よりは聖祖御一代の幻燈を點出して無事散會せり。此會に奇特なりしは本誌九十一號に掲げし奈義山下改宗徒十二戸の内十一人まで、山河三里半乃至四里の道程をも尙は遠はしどせずして來聽したることは是也とぞ。

●勝間田の開教 作州勝間田の三宅清四郎頼田治朗頼田金一氏等會主となり、舊臘二十四日午後五時より開會せり。

●勝間田の開教 作州勝間田の三宅清四郎頼田治朗頼田金一氏等會主となり、舊臘二十四日午後五時より開會せり。

以上作州の報道は影山謙二氏の「作州の大師子吼」中より採萃せり。同氏の同寄稿は本誌へ掲載する都合なりしも、紙の都合に依り遺憾ながら掲ぐる能はず。次號に掲載するあらん。

●第六教區布教方法 決議

- 第一條 區内布教の進行上監督顧問としては板垣日原上人比野日暹上人飛山日完上人の三師とす
- 第二條 區内布教實行の爲め左の賛助員を置く今井警敏渡邊玄雅の二師とす
- 第三條 區内布教は各部に毎月一回以上を執行する事
- 第四條 今回特別通過布教として各寺へ一周する事
- 但し寺院密接の地は合併一ヶ寺若くは二ヶ寺に於て執行す
- 第五條 各寺に於て布教開延の當日は部内寺院僧員は辨當持參にて出勤する事
- 第六條 布教當日は各寺檀家惣代人を成るべく招集する事
- 第七條 布教の會場密接の地は專任布教員の指定に依る事
- 第八條 布教費は壹ヶ年分金六圓とす
- 第九條 區内に臨時布教の必要起りたるときは區内の協議費を以てす
- 第十條 布教開延の當日事故あつて欠席の必要あるときは其事實を記し書面を以て開場へ届出べき事
- 但し常置布教員の宛に認むべし
- 第十一條 布教員及び賛助員に對し一汁一菜にて時食せしむる事
- 第十二條 布教の會場へは五日間以前に專任布教員より通知せしむる事

第十三條 布教會場の寺院は布教員より通知を受けたるときは直に其部内各寺へ報告する事

第十四條 演説を教執行の當日には部内各寺の檀家信徒を精々誘導し傍聴せしめ且つ廣く社會に廣告を爲すべき事

第十五條 前項の條々布教實行に差障を生せし場合には區内總會の上三分の二以上の多數決議を以て變更することを得るものとす

右條項は教區内惣集會の決議を経管事へ具申し茲に報告と同時に即日執行候也

明治三拾五年十一月廿六日

第六教區常置布教員 總 崎 日 憲

●千葉縣顯本法華宗第六教區布教記 去る十一月廿日轉任常置布教員龜崎日憲御就職後直に全月廿四日大綱町本國寺管事駐在所に教區内惣集會を開き將來布教方法を布教員より提出せり之れを議せしに出席者一同一點の異議なく決議し全月廿六日を以て布教方法を執行せり其條項第十箇條より成り議決條項は別紙の如し去る十一月三十日午後一時より上總山武郡丘山村瀧清觀寺に於て演説を開會せり當日大雨にも拘はらず聽衆百三十余人にして其演題及辯士は

責任辨士常置布教員は二時間の長時間に涉り別勸諭及び安福を打破り加ふに檀家惣代人の責任等を懇篤に説示し終りに信仰の基礎を論じて降壇せり了て其夜七時より懇親會を催し檀家惣代及び篤信者古川修平氏來り數番の席上演説あり中に二三の質問あり此れに懇示し非常の盛會を極め將來布教の必要且つ有望の地勢に之れあるなり次に去る十二月九日午後一時より上總山武郡瑞穂村南横川芳墳寺に於て演説を開會せり當日大雨の爲め聽衆三十名の少數なれども飛山日完石井日證兩氏勸誘の爲め篤信家の聽衆にて午後六時點燈后二時を過ぎて閉演せり該演題辯士は

物出現の理由

古今の人格を論じて英進防禦に及ぶ

崎 日 憲

責任辨士布教員龜崎日憲は四時間の長演説にして喝采の聲と共に今後の演説の義を約して會散せり燈火后一時半余に及べり

次に去る十二月十九日上總山武郡瑞穂村清名幸谷東光寺に於て演説會を開き天氣晴朗暖氣を催し春季を感じ午後一時半より任職草切榮玉氏大に誘導せしを以て近在の有力家且つ教育ある青年者の來會あり聽衆六十名余に及び夜に入り午後七時半に閉會を告げたり其盛會近年稀れなり出席辨士並に演題は左に

開會の趣意

草切 榮玉

信仰の光明

山名木信廣

波 邊 玄 雅

毎に死と戦ひ、醫師は病毒の撲滅を計畫し、警官は罪惡の檢察に盡力しつゝあるのである。釋迦牟尼佛と皇太子の寶位を捨て發心せられたる勳機は、何如でありしかと云ふに、貴賤貧富の別なく生者必滅の理を免るゝ能はず、人生終局の苦惱は死魔である、如何にせよこの死と戦て勝利を得べきかこの大疑問が根源となつたのである、而して釋尊の成道と云ふのは、生死を解脱して常住不滅の金剛身を得たのを云ふのである、佛陀出世の本懷たる開迹顯本の如來壽量品には、正しく如來の壽命を詮量し無始無終無常任なりと説教し、佛壽の長遠なるを讚美せられてある、以て佛教は如何に生命の貴重なるを説くかを待することが出来しやう、拙僧は嘗て何物が是れ第一の寶なりやとの題下に、宇宙萬物皆生命ありて後に必要を生ずる所以を説き、三千世界の凡ての寶を一團となして吾人の生命に比するも尙ほ且つ及ばざるを論じ、古人の一切實中命實是第一の言を以て諸君に説明したとがある、されば佛教の衛生談は普通衛生以上に特殊の衛生論あるとを御承知願ひたいのである。

吾人は身心相關の理によりて、生命を保護して居るのである、醫師は身体組織を研究し、生理上よりして治療を加へ、僧侶は精神狀態を研究し、精神を主權者と認知し、身体組織を以て精神の上の表現とみなして、無病健康を祈るのである、この點が普通衛生と佛教衛生の差違點である、然れども身心は固一體不二の相關の理によるを以て、決して衝突せざるのみならず、相扶助すへき因縁を結ぶのである、茲を以て普通病尸の際に處しても生死解脱の大安心に住するときは、醫藥の効と共に偉大なる利益を奏するのである、特に傳染病流行の時に於て著るしきを見るのである。

傳染病預防法につきて信仰か普通衛生に如何なる關係利益を有するやの點につき、明解を與へんか爲に戰爭の譬論を以てすべし、日清戰爭の當時にありて考ふるに、日本人を清國人と個人の上と比較するに甲乙ありと云を得ざるも、日本人は悉くも萬世一系の天皇陛下の大御心を奉戴するを以て、神聖にして侵すべからざる絶對無限なる勇氣を喚起したからである、個人は個人の力量にあらして皇室の威徳の徹底したる個人である、詔々十訓斷であるから凱歌を奏したのである、個人が皇室の念を離れたときは敗軍であるが、個人が皇室を合したときは大勝である、そこで又皇室は常に個人の心裡に宿り給ふのである、傳染病に對する亦斯の如し。

傳染病流行に際しては戦地に望むの決心をもち、醫師の注意を以て一身を武装し、病尸軍と闘はざるへからざるは勿論なるも、勇氣平常に百倍するの覺悟なかるへかず、然らば之を得るの道如何曰信仰を捨て、他に良法あるを知らず、請ふ少しく之を説かん。

抑も予が所謂信仰とは妄境を迷信するの謂に非ずして、正境を信仰するを云ふ正境とは本有の尊形にして、生死解脱の大醫王不老不死の大妙藥なり、この正境を信するときは生死に於て自在を得、煩惱を出離して安心なり、經に是好良藥今留在此汝可服勿憂不差と説くものは是れなり、この正境に住するときは、人生の根本問題たる安心立命を得、勇氣頓に倍增せん、茲を以て正信に安住する人は病尸と戦ふにありて、徒らに警怖の念におうはるゝとなく、勇往突進病尸を退治すると、尙彼の皇室を奉戴する軍人が、敵軍を擊退するか如し吾人は信仰によりて、新らしき生命を得るも、信仰を離るれば之を得ると難し、而して本尊は毎に吾人に感應を垂れ給ふとを忘れてはならぬ。

傳染病預防につきて注意すへき點二ツあり、驚怖の念を去ると同時に輕蔑の念を離るゝとは是なり、彼の戰時

に於て大敵とても驚く勿れ、小敵とても蔑る勿れと謂ふか如し、この二點に就て、醫師の注意に従ふは勿論なるも無形的に云へば生死解脱の妙境界に遊んに如くものはない是れ方便に非ずして眞實（中略）之を要するに信仰は衛生の敵と思ふは妄境を迷信するものを見て速断したる誤解にして、正境を信仰するは衛生と密接なる關係あるを見る、亦衛生は信仰の敵と云ふものは偏狹なる迷信者の云ふとにて、其の範圍を明知せざるの愚に墮すのである。

願くは諸君身心の相關の理によりて面より衛生の本旨を了得し更に百尺竿頭一步を進め精神界に於けるパナルス即ち煩惱を消毒し、悪業の障礙を除き苦果の境界を解脱し、吾人の壽命を説くと佛壽の長遠なるか如くならんとを欲する次第である、尙詳細は寺院に於てせん



謹賀新年

統一團本部
統一團編輯局
各地本會支部

謹賀新年

宏師寮本部
宏師寮事務所
壬寅會

恭賀新年

僧俗同信會
各地本會支部

謹賀新年

本多日生

謹賀新年

正法護持會
格言遵奉會
自我偈俱樂部
岡山篤信會
中國九州聯合團
蓮正會

謹賀新年

今成乾隨

謹賀新年

板垣日暎

謹賀新年

小林日至

恭賀新年

小川日豐

恭賀新年 大學 林同窓會

恭賀新年 山根 顯道

元三の御慶日出度申納候

井村 恂也

恭賀新年 松尾 英四郎

本年は何方へも年始狀を差上不申甚だ其禮を欲さ候處
不取敢本誌上にて御禮申候也 謹言

恭賀新年 野口 義禪

恭賀新年 葦名 日幸

恭賀新年 萩原 啓門

謹賀新年 牧田 日禧

謹賀新年 鈴木 晴學

謹賀新年 中村 日敢

恭賀新年 能仁 事一

恭賀新年 里見 圓海

恭賀新年 内藤 智厚

恭賀新年 野老 乾爲

恭賀新年 山名 木信

謹賀新年 原田 容廣

謹賀新年 高田 日暢

謹賀新年 木村 乾中

恭賀新年 廣部 永眞

謹賀新年 笹川 眞應

恭賀新年 日比野 觀義

恭賀新年 土屋 眞容

恭賀新年 龜崎 日憲

恭賀新年 草切 榮玉

恭賀新年 前田 日應

恭賀新年 横溝 日葉

謹賀新年 中村 日敢

謹賀新年 大橋 日襲

謹賀新年 上田 智量

恭賀新年 屏市辯護士 村上 貞

謹賀新年 増田 聖道

謹賀新年 窪田 純榮

謹賀新年 久城 義太郎

謹賀新年 朝倉 智鑑

謹賀新年 河野 日台

謹賀新年 長谷川 日濟

謹て開宗六百五十一年の新春を賀す

岡山縣美作國勝田郡勝加茂村

影山 謙二

舊臘より旅行致居り候爲め宗友諸君に年賀
狀をも六日の舊曆の差上不申これにて御免
蒙り申候

謹賀新年

◎聖門編素各位の萬福を祝し
 ◎併而會員諸君の平安を悦び
 ◎伏前途經營の翼賛を希ふ

東京市神田區柳原河岸十七號地

宗徒大會決議實行期成

癸卯元旦

(電話浪花一一〇一番)

會 監

本多 日生
 江上 義博

幹 事

乾能 隨
 眞毅 三郎
 日原 秀郎
 觀太 郎
 英郡 雲

會 計

及今 成
 小笠原 川
 小川 倉
 中本 木
 青木 塚
 松原 塚
 英郡 雲

謹賀新年

客歲末本會社假定款發表御送り申置候
 間爲法爲國御賛成被下株式御引受被降
 候様奉懇願候

尙定款御所望の御方は御報次第直に送
 呈

東京市神田區柳原河岸十七號地

四海新聞株式會社 創立事務所

癸卯元旦

(電話浪花一一〇一番)

小倉 豐三郎
 河原 清次郎
 中川 觀藏
 松本 郡太郎

宗徒大會決議實行期成同盟會々員諸君
 並に聖祖門下僧俗有志各位御中

謹賀新年

備前和氣支部

吉田 完亮
 外 役 員

謹賀新年

京都市室町通六角下ル町

中村合名會社
 中村 兵三郎
 (特電話三百八拾四番)

御法衣商

本會事務所を左に移轉す
 小石川區指ヶ
 谷町延壽院内

橘 香 會

學習院教授清水澄君序文
 内務省參事官中川友次郎君跋文
 内務局長松本泰介君編纂
 色クローリス金文字入
 紙數凡百五十頁餘

現宗 教 法 令

完 定價金一圓拾錢
 郵税金十二錢

發行所 東京神田區一ツ橋通七番地
 有斐閣書房

「妙宗」改善のしらせ

紙數増加 代信依舊

雜誌「妙宗」は第六編第壹號より(明治三十六年一月より)毎號十六頁づゝ、法華經自我偈及の講義欄を増刊し

ひ祖典如說修行鈔の講義を續

べし法華最勝の宗旨妙宗特色の要義日月の天に懸るが如く教界及世間の闇を照らさんとす講者は本誌主筆田中智學居士にして用文平明釋義痛快体例また一種の風を備へ冠注には文段の指票又は餘意を擧げ且本文及び講話中の科語を解釋して局外のものにも解し易きやう周到の用意を用ひて信行講學の資益に備ふ。志あらんものは第六編第一號より續讀ありたし。

其他寫真欄布教欄雜稿欄をすゝ光采を増して宗教雜誌中の雄たり。

○本誌定價一部金拾錢郵税金壹錢○壹ヶ年前金壹圓貳拾錢○爲替は鎌倉局○受取人は鎌倉町妻山師子王文庫○郵卷代用は必ず壹割増の事

發行所 相州 鎌 倉 要 山 師子王文庫

恭賀新年

東京市日本橋區通二丁目六七番

日宗生命保險株式會社

(電話本局千三十番)

北友雜誌

松森靈運 每月一回十八日發行
一部金五錢一ヶ年分金六十錢
本誌は東北の宗門機關なり

發行所 京都市小石川
白山大乗寺内

北友雜誌社

主筆 武田宣明

教友雜誌

毎月一回(十日廿五日)發行
定價一部(郵稅共)前金五錢
一ヶ年分前金壹圓貳十錢

發行所 甲府市
稻門村

教友社

主管 佐野貫孝

日本之柱

毎月一回(十五日)發行
定價一圓金五錢一ヶ年分金
五十錢爲替は大坂高津局振
込郵券代用は五厘券一割増

發行所 大坂市東區西高津
中寺町五一六番

立正社

主筆 田中智學居士

妙宗

發行所 相模鎌倉
要山

師子王文庫

▲毎月一回(八日)發行
▲每號大附録附
▲定價一部金十錢(附録共)
▲郵稅金一錢壹ヶ年分金壹
圓貳拾錢(不要郵稅)
▲送金は師子王文庫宛鎌倉
局振込の事

日宗新報

發行所 東京池上

日宗新報社

毎月三回(八、日)發行
一部金五錢一ヶ年分金一
圓六十五錢爲替は武州
池上郵便受取所へ御振
込一日宗新報主任加藤
文雅と御指定

輪王

發行所 武蔵國程ヶ谷岩間

輪王新聞社

毎月十五日發行
一部金一錢
一ヶ年分金十二錢

六社同盟購讀料 帶納者處分法

雜誌購讀料を帶納し遂に其支拂を果さざるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に揭示することあるべし

明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す

教友雜誌 日宗新報
妙宗 日本之柱
北友雜誌 統一

本團廣告

一金拾圓 品川本光寺

中村 日 雍殿

右は本團が本月より停車場に備付の雜誌布教を賛成し寄附せられしもの也

東京市淺草區南松山町
統一團

廣告

小生事今般宗務監常誌を辭し府下在原郡品川町高等宗學院へ入校候間小生宛の信書は右に御送附被下度候

松尾 英四郎

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞

一雜誌交換、寄稿 共移轉先へ願付

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割増但五厘切手
- 一請讀申込の節は住所姓名を階書にて認むべし
- 一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
- 一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或以爲替振込の節拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅六年一月十五日印刷發行

發行所 井村 恂也
編輯人 山根 顯道
印刷人 鈴木 暲學

發行所 東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團

統一

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可)
 (全冊六年二月十五日發行) 統一 第九十四號 每月一回十五日發行



第九十四號

勅題新年海

新年や神代の海の昔を想ひ
 海の日や阿さなくともほゝみみぬ
 海の面に富士あさやいや神代の春
 琵琶の面を海に見なして朝日の出
 皇宮の姫御前達も羽根をばさ
 今日は大平洋上御慶かな

し
 の
 ぶ
 同 同 同 同 同

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可)
 (全冊六年二月十五日發行) 統一 第九十三號 發行所東京市淺草區南松山町四十五番地

一